

場所 京都府京都市

面積 2.3ha

活動目的 古来、日本人が理想とする自然と文化が融合する環境を育む樹林と庭園を将来にわたって適切に保全し、その文化的、自然的価値を広く人々に知らせることを主目的とする。

サイト概要 延暦13年（794）の平安遷都の際に創建されたと伝えられる城南宮は、平安時代後期に白河上皇や鳥羽上皇が当該地に大規模な苑地をめぐる離宮を造営した城南離宮（鳥羽殿）の中心に位置した。城南離宮は『源氏物語』に描かれた四季の庭を理想として築かれたと指摘され、雅やかな宴や船遊びが行われた。城南宮の神苑内の小山は、春の山と呼ばれ、離宮の築山の遺構と伝えられる。室町時代に離宮が衰退した後も、地域の鎮守として尊崇され、境内の社叢は大切に守られてきた。

境内の南側を明治時代に庭園として、さらに終戦後、昭和を代表する造園家中根金作が岩組などを整え、楽水苑と名付けて公開するようになった。後に『源氏物語』ゆかりの樹木・草花を増やし、様々な植物が四季を彩る興趣に富んだ庭園（神苑）となっている。また、遣水の辺で「曲水の宴」（平安時代の宮中での歌会の再現）が4月に、禊の小川で「人形（ひとがた）流し」が6月に行われるなど伝統行事の舞台ともなっている。



**土地利用の
変遷**

本サイトは、古代より聖なる森であり、神社の境内として自然が維持され、現在に至っている。

**サイト周辺の
環境**

本サイトは市街地にあり、周辺は住宅地であるが天皇陵や離宮ゆかりの史跡も点在している。西側は鴨川、北側は名神高速道路、東側は第二京阪道路に近接する。

**アピール
ポイント**

本サイトでは、社殿の周りに趣の異なる5つの庭園（神苑）が配置され、それぞれに独特の文化的かつ自然的景観を持つ構成となっている。各神苑に通底する理念は、「日本の神は、花が咲き、鳥がさえずる四季の庭が御殿の周囲に広がり、年中行事が麗しく行われる世界に住んでいらっしゃる」という、日本人が思い浮かべてきた神々の世界、すなわち、日本人が理想とした自然と文化景観を保つことにある。その世界は、『源氏物語』の光源氏の邸宅、六条院に描かれた、草本花木が生育する理想的な四季の風景であり、神苑は、それを具現している。

生物多様性の価値

価値（4）生態系サービスの提供の場であって、在来種を中心とした多様な動植物種からなる健全な生態系が存する場

【場の概況】

京都市街地のただ中であって、京都市民、観光者等が容易に自然と文化に触れられるとともに、神の息吹を感受できるという生態系サービス提供の場であるとともに、在来の植物や昆虫類が比較的多種生育生息する場となっている。
日本在来の植物としては、『源氏物語』出所の草本百余種の植栽を目指しており、現在86種が生育している。

【主な植生】

マツ類、カエデ類、クスノキ、ムクノキ、ツバキ類、ウメ類（しだれ梅）などが植栽されている。

【確認された主な動植物など】

（植物）ツユクサ、セリ、タデ類、オミナエシ、ススキ、キキョウ、フジバカマ、ハギ類、コオニユリ、ミゾカクシ、ミクリ類、クヌギ、ウツギ、ササユリ、ナツツバキ、ハマオモト、ツルリンドウ、マサキ、ハクショウ、サネカズラ、シノブ（その他源氏物語に描かれた花や木々が植栽されている）

（鳥類）キジバト、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ムクドリ、イソヒヨドリ、スズメ、ヤマガラ、シジュウカラ、エナガ、カワラヒワ、セグロセキレイ、ジョウビタキ、ウグイス、モズ、ツグミ

（昆虫類）チョウ類：アオスジアゲハ、キタキチョウ、ウラギンシジミ、ムラサキシジミ、ムラサキツバメ、ヤマトシジミ、ツマグロヒョウモン、コムラサキ／バッタ類：オンブバッタまたはアカハネオンブバッタ／トンボ類：ハグロトンボ、キイトンボ、クロイトンボ、ギンヤンマ、コシアキトンボ、ショウジョウトンボ、ウスバキトンボ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ／カメムシ類：ニイニイゼミ、クマゼミ、アブラゼミ、アメンボ、オオアメンボ／コウチュウ類：シラホシハナムグリ／ハチ類：タイワンタケクマバチ



写真の説明：キイトンボ



写真の説明：オオアメンボ

生物多様性の価値

価値（5）伝統工芸や伝統行事といった地域の伝統文化のために活用されている自然資源の供給の場

【場の概況】

「平安の庭」：地下水が滝から流れ落ち池をつくり、さらに遣水となっている。周囲に紅葉や、椿が植栽された苔庭が広がっている。

「春の山」：樹林に囲まれた築山が梅林となっており、小川が流れている。

【伝統文化等の名称】

「曲水の宴」（奈良時代から平安時代にかけて宮中でも催された歌会を再現する行事で、昭和44年に考証再現され、現在京都を代表する年中行事として毎年4月29日に「平安の庭」で行われる。）

「人形流し」（神社本殿と拝殿の間に設けられた「茅の輪」をくぐり抜け、さらに半年間の罪や穢れを移した人形（ひとがた）を「春の山」の「禊（みそぎ）の小川」に流して心身を清め、無病息災を祈願する平安時代からつづく行事。毎年6月下旬に行われる。）

【活用している自然資源】

いずれの行事も、神苑の地形、動植物、景観が十二分に活用されている。

「曲水の宴」は、大きく枝を広げた青紅葉などの新緑に囲まれて美しい苔が広がり鳥がさえずる「平安の庭」に、男女の歌人が座り、和歌を詠み、遣水を流れ来る盃をとり御酒をいただく行事。苔の庭に緩やかな勾配の遣水が流れ、小高い丘や高木低木とで織りなす景観が、行事の重要な舞台として活用されている。

「人形流し」は古代から続く年中行事で、城南宮では「春の山」の「禊（みそぎ）の小川」を斎場として行う。夏越の大祓に参加する人は、小川のほとりで、白い紙を人の形に切り抜いた人形で左胸右胸を撫で、息を吹きかけてから小川に流して半年間の罪穢を祓う。神の息吹が感じられる緑の中、清廉な水の流れが重要な役目を果たしており、城南宮神苑の地形、植物、景観が、行事の重要な舞台として利用されている。



写真の説明：「曲水の宴」の様子



写真の説明：「春の山」の景色

生物多様性の価値

価値（6）希少な動植物種が生息生育している場あるいは生息生育している可能性が高い場

【場の概況】

「平安の庭」の水辺環境にはミクリ及びヒメミクリが生育している。『源氏物語』由縁の植物であり、昭和55年（1980年）頃、廣江美之助博士指導のもとミクリは福知山市付近から、ヒメミクリは滋賀・福井の県境付近から移植されたが、病気で枯れた。現在のものは後年、日本新薬株式会社山科植物資料館より一部移植したもの。また、平安の庭の苑路沿いにはフジバカマが生育している。『源氏物語』由縁の植物であり、昭和55年（1980年）頃、廣江美之助博士指導のもと、京都市内西山地区から移植したもの。

【確認された希少種】

ミクリ(*Sparganium stoloniferum* : 京都府RDB絶滅危惧種 : 環境省レッドリスト2020準絶滅危惧)

ヒメミクリ (*Sparganium stenophyllum* : 京都府RDB絶滅寸前種 : 環境省レッドリスト2020絶滅危惧Ⅱ類)

フジバカマ (*Eupatorium fortunei* : 京都府RDB絶滅寸前種 : 環境省レッドリスト2020準絶滅危惧)



写真の説明：ミクリ



写真の説明：フジバカマ

サイトの活動計画・モニタリング計画

活動計画の内容	モニタリング計画の内容
【活動の目的】 古来、日本人が理想とする自然と文化が融合する環境を育む樹林と庭園を将来にわたって適切に保全し、その文化的、自然的価値を広く人々に知らしめることを主目的とする。（活動計画の内容）下記の通り年間を通じて庭苑の草本、樹木 【活動計画の内容】 下記の通り年間を通じて庭苑の草本、樹木等の管理、清掃等を実施。 1月 剪定（マツ、カシ、カイツカイブキ）、シバ刈り 2月 マツの剪定、施肥 3月 剪定（マツ、ウメ）、ソテツの菰外し 4月 剪定（マツ、カシ、クス、ツバキ）、施肥（全域） 5月 剪定（カシ、クス、フジ） 6月 剪定（クス、ツツジ、カキツバタ）、田植え、管理（ヨシ、ベニバナ） 7月 剪定（シイ、ビロウ、ツツジ）、シバ刈り、生育状況の確認・剪定、枯枝葉の除去、病害虫の有無確認（ミクリ類、ハス、春の七草、「源氏物語」ゆかりの植物） 8月 剪定（マツ、カシ、茶花類） 9月 剪定（マツ、カシ） 10月 剪定（ツツジ、ハギ） 11月 剪定（マツ、アセビ、モミジ、ショウブ、ススキ） 12月 剪定（マツ、ツワブキ）、ソテツの菰巻き 【年間活動実施部署】 秋田徹（農学博士：元日本新薬株式会社山科植物資料館館長）の指導のもと、城南宮神苑部及び村上造園株式会社が実施	【モニタリング対象】 庭苑の景観要素であるサイト内の動植物全般を常時観察しているが、特に「源氏物語」ゆかりの植物（ミクリ、ヒメミクリ、フジバカマを含む）については生育状況を注視している。 【モニタリング場所】 サイト全体 【モニタリング手法】 通常の庭園管理にあわせて観察。なお、「源氏物語」ゆかりの植物については秋田徹博士と共に源氏物語植物保存会会員らが観察会を兼ねて毎年視認し、調査票を作成している。 【モニタリングの実施時期及び頻度】 通年。ほぼ毎日。なお、「源氏物語」ゆかりの植物については年2回初春・初夏に秋田徹博士も確認。 【モニタリング実施体制】 城南宮神苑部、村上造園株式会社が実施。「源氏物語」ゆかりの植物については秋田徹博士が指導。